

と く
徳

ほ う
朋

ほんぞん
「本尊」とは何か

かい ほうりゅう
海 法龍



かい ほうりゅう
1957—現在
熊本県生まれ。真宗大谷
派長願寺住職。真宗大谷
派首都圏教化推進本部員

「本尊」とは、文字通り「本当に尊い」ということです。私たちの人生において、人間の存在において「本当に尊いこと」とは何か、ということをはっきりとしたのが、お釈迦さまの教えです。ですので仏教は「本当に尊いこと」を伝えるためにあるのです。私たちはどうでしょうか。何を尊いとしているのでしょうか。普段はあまり考えていなくても、生活の中で、「本当に尊いこと」を、実はどこかで求めながら生きていてはいないのでしょうか。しかし求めながらも、なかなか出会うことができない。

「これが尊いことである」と、そう言い切れるものが私たちにあるのか、ないのか。もしかすると、私たちは、本当でないものを本当にし、尊くない事を尊いこととしているのかもしれない。わかっているようで実はわかっていないのではないか。健康・金銭・学歴・地位・財産・家柄・名誉・権力、自分の命、何が尊いのでしょうか。本当の反対は嘘、本当の反対は偽物、イミテーションです。イミテーションを求めるといって、そしてそれを尊いという人は誰もいないのではないのでしょうか。だから私たちは「本当に尊いこと」を無意識に求める存在なのです。人間の在り方や、何をよりどころにして生きていくのかという問題です。

以前、ある新聞に、障害のある子どものお父さんからの投稿が掲載されてありました。生ま

れた直後は、その現実を受け止めることが難しかったけれども、子どもの成長を見守る中で、その子から教えられることがたくさんあり、自分自身が問われる毎日を生きているという内容でした。その中で自分は我が子の「存在」を「尊在」ではなく「損在」にしていたと、自分の価値観の差別性に痛みを感じながら書いておられました。

こういう存在の事実と、その事実の受け止めを課題にしてきたのが、親鸞聖人の出遇った浄土真宗という仏教です。その仏教が、私たちに「本尊」、つまり阿弥陀さまのお姿を通して、私たちの人生において「本当に尊いことは何ですか」と問いかけているのです。

親鸞聖人は、阿弥陀さまは色や形がなく、思いが及ばないとおっしゃいます。その言葉を超えた無色・無形の実体がない阿弥陀さまが、私たちのために「形」となってくくださった。その「形」を「本尊」といい、真宗門徒は教えに遇う大事なよりどころとしていただいていたのです。「本尊」に向き合いお参りすることは、「形」を通して教えに遇うという意味なのです。ご家庭のお内仏にお参りすることも、そしてお墓で手を合わせることも同じです。

『真実のよりどころ』



この「徳朋」は仏教を拠り所としている方々の言葉に直に触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、気にせずご家族で読んでみてください。※過去のものを含めお寺のホームページでも読むこともできます。

